

佛說嗟轆囊法天子受三歸依獲免惡道經

に就て

高 島 寛 我

先づ經名の解釋をせんに、嗟轆囊とは梵語 *Cyavana* の音譯で、*Cyavana* とは下生、轉生等を意味するので、即ち、命終りて他生を受けることをいふので、こゝで嗟轆囊法天子とは轉生の法を有する天子、又は轉生するために命終の運命にある天子の意味で、この天子が三寶歸依の功德によりて、惡道に生れるのを免れ獲たことを説ける經である。本經は頗る短經で、正藏第十五卷經集部の一二九頁—一三〇頁に亘るもので、その梵文は、大體、*Divyāvadāna* の第十四、*Sūkarikāvadāna* (P. 193—196. *Divyā.*) に相當するものである、佛蘭西のレオン・フェーア (Léon Feer) 氏は其著甘珠爾拔萃 *Fragments extraits du Kandjour* (*Annales. Musée Guimet* 5) に於て *Sūkarikāvadāna* がその藏譯として *Mdo XI 3* (Folio 427—430) に存し、全く梵文と一致することを述べ、その佛譯を掲げて居る、本論はこの經が、後に、寶喻鬘經 (*Ratnamalāvadāna*) に於て大乘的に潤飾増廣せられたる *Sūkarāvadāna* (*Ratnamalāvadāna* P. 77—85) として存在せるものと比較して、古經典が大乘經典に發展せる一様相を見んとするものである。今本經の梵文 (*Divyāvadāna* P. 193—196) を次に和譯する。

轉生する運命にある天子には法として實に、五種の前相が現はれる、先には穢れなかつた衣服は穢れる、先には萎まなかつた花臺が萎む、惡臭が身に生ずる、兩腋から汗が出る、轉生の運命にある天子は自分の座に安住することを得ない、さて、とある轉生の運命にあつた天子は地上にまろび、輾轉して云ふた、苦しいかな、あゝ天の漫流よ、あゝ蓮池よ、あゝ井泉よ、あゝ衆車苑よ、あゝ麤惡苑よ、あゝ喜林苑よ、あゝ雜林苑よ、あゝ圓生樹よ、あゝ靚布の如き扁石よ、あゝ諸天の會堂よ、あゝ喜見城よ、といふて、彼は切々として悲しんだ、諸天の主長なる帝釋天は、かの天子の甚しく地上にまろび、輾轉して居るのを見た。見て、かの天子の方へ近づいて、かの天子にかく云ふた。友よ、御身は、何故に、甚しく地上にまろび、輾轉して切々として悲しみ、あゝ天の漫流よ、あゝ蓮池よ、あゝ井泉よ、あゝ衆車苑よ、あゝ麤惡苑よ、あゝ喜林苑よ、あゝ雜林苑よ、あゝ圓生樹よ、あゝ靚布の如き扁石よ、あゝ諸天の會堂よ、あゝ善見城よといふて切々として悲しむやと。かく云はれて、天子は諸天の主長、帝釋天にかく云ふた、橋戸迦よ、この私は天の樂しみを享受したのであるが、今より七日目に王舍城にて猪の腹に生れるであらう、そこで私は多年、糞尿を食せなければならぬであらうと。その時、諸天の主長なる帝釋天は悲愍を以て、その天子にかく云ふた、「來れ、友よ。御身は兩足あるものゝ中の最勝なるものなる覺者に歸依せよ、離欲の最も勝れたるものなる法に歸依せよ、衆團中の最も勝れたるものなる僧衆に歸依せよ、」と。この時、かの天子は、畜生の胎内に生れる恐怖に怖れ、死の恐怖に怖れて、諸天の主長なる帝釋天にかく云ふた、橋戸迦よ、ここに私は兩足あるものの中の最勝なるものなる覺者に歸依します、離欲の最も勝れたるものなる法に歸依します、衆團中の最勝なるものなる僧衆に歸依します、と。さて、かの天子は三歸依を攝受せるものとなりて、その生を去り、死して兜率天に於ける天部衆の中に生れた。

凡そ常法として實に諸天の智見は下方に轉じ動き、上方には轉じ動かない。この時、諸天の主長なる帝釋天はかの天子を觀察する。かの天子は牝猪の腹中に生れたりや、又は爾らざるかと。乃至彼は見る。畜生餓鬼中に生れて居ない。地獄中に生れたのであると見るに生れて居ない。人間の同分中に生れたのであると見るに、生れて居ない。四大王衆天、三十三天を觀察し始めた、そこにも見なかつた。この時、諸天の主長なる帝釋天は奇異の念を生じて世尊の居ます方に近づいた、近づいて世尊の兩足を頭にて拜して一隅に座した。一隅に座して諸天の主長なる帝釋天は世尊にかく申上げた、

「大德よ、こゝに私は、とある轉生の運命にある天子が地上にまろび、苦しいかな、あゝ天の漫流よ、あゝ蓮池よ、あゝ井泉よ、あゝ衆車苑よ、あゝ鬪惡苑よ、あゝ喜林苑よ、あゝ雜林苑よ、あゝ圓生樹よ、あゝ青白の氈布の如き扁石よ、あゝ諸天の會堂よ、あゝ善見城よと云うて切々として悲しむを見た、その彼れに自分は言うた、「友よ、御身は何故に、いたく、歎き、悲しみ、號泣し、懊惱し、昏迷に陥れるか」と。彼はかやうに言うた。「橋尸迦よ、この私は天の楽しみを棄て、今より七日目に、王舍城に於ける牝猪の胎内に生れるであらう。そこで私は多年、糞尿を食べねばならぬことになるであらう」と、その彼に自分はかやうに言ふた。「來れ、友よ、御身は、兩足あるものゝ中の最勝なるものなる覺者に歸依せよ、離欲の最も勝れたるものなる法に歸依せよ、衆團中の最勝なるものなる僧衆に歸依せよ」と。彼はかく言うた、「橋尸迦よ、この私は兩足あるものゝ中の最勝なるものなる覺者に歸依します、離欲の最も勝れたるものなる法に歸依します、衆團中の最勝なるものなる僧衆に歸依します」と言うて彼の天子は命終しました。大德よ、かの天子は何處に生れましたか」と。世尊は宣うた、「橋尸迦よ、兜率と名ける天界は一切諸欲が成満して居る、かの天子はこゝにて三歸依をなして、そこに（生れ）て樂しみ居るので

ある」と。ここに、諸天の主長なる帝釋天は歡喜して、正にこの時に次の偈を説いた、

佛に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する。

法に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する。

僧伽に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する。

この時、世尊は諸天の主長なる帝釋天の説きたるを隨讚してかく言うた、憍尸迦よ、是の如くである、是の如くである、

佛に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する。

法に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する、

僧伽に歸依するものだちは惡趣に行かない、

人身を棄て、天身を獲得する、

この時、諸天の主長なる帝釋天は、世尊の説かれたるを歡び、隨喜して、世尊の兩足を頭にて拜し、世尊を三たび右繞し、合掌して世尊を禮しつゝ、其處にて消え去つた。

と、吉祥なる尊き因縁談に於ける第十四、猪因縁談。

以上がディギアードグーナの中の猪因縁談であるが、次にラトナマーラーググーナの中に現はれた同因縁談を和譯する。

かくて、また、行者の王にして勝者の子なる優波邇多は三寶憶念の功德を語るべく、王に説いた。大功德威力は、三寶憶念より生ずる、それを予はあなたに説きませう、王よ、心を専らにして聞かれよ。

常法として實に、天より轉生する運命にある諸天には、自己に、五つの前相が現はれるであらう、轉生の際には先に穢れなかつた衣服が穢れるであらう、先に萎まなかつた花鬘が、速やかに、萎むであらう、惡臭が身より發するであらう、兩腋より汗が出るであらう、轉生の時期に達した時には、自分の座に安住を得ないであらう。これらの五相が一切の天から轉生する運命にあるものだけに、轉生の時期が來れる際に現はれるであらう。昔し、一人の、かく轉生の運命にある天子に、轉生の前に、これらの五相が現はれた。この時、轉生の運命にあるかの天子は失望せしめられた、天よりの轉生は必定であると思ひ、心惑ふて啼泣した。自分の天宮にありたる彼れは、まろび、輒轉して、氣を失ふた、再び正氣をとり回して嗚咽して悲しんだ。あゝ天の漫流よ、蓮花に満ちたる(池)よ、功德ある水を有するものよ、汝の所にて沐浴したるも、何故にわれはこゝを離れて惡趣に行くのであらうか、あゝ衆車苑を棄て、いづこに、意のままに遊ぶべきか、あゝ樂しき善林苑を棄て、われはいづこに樂しむべきか、あゝ天の雜林苑を棄て、今、いづこに樂しむか、あゝ癩惡苑を棄て、いづこに、天女と共に樂しむであらうか、あゝ、青

白の氈布の如き扁石なくしていづこに樂を得ようか、あゝ諸天の衆會を棄て、いづこに善説を聞くであらうか、あゝ、あゝ、樂しき善見の城邑を棄てて、われはこの生を去りて、行くであらう、帝釋天の最勝宮を何れの時にわれはまた見るであらうか。あゝ、帝釋天を首めとする諸天との戯れを樂しみたるに、今や、それを聞くことすらの樂しみを、どこにもわれに得られない。あゝ天の甘露を棄て、今、何を食ふであらうか、天の欲樂を享けて後、また惡趣に至り地獄に於て幾ばくの苦を受けるためにわれは行くのであらうか、この天の大歡喜を失ひてわれは地獄に行き、大苦に苦しめられ、その時、如何にして堪へるであらうか、あゝわれは自分の罪にて壞れた、われにより如何なる罪が爲されたるか、その罪に依り、この天から没して地獄へ行くであらう、惡趣に行かないやうに如何なる方法をなすであらうか、私を法に結びつけるであらう私の師は何人かここにあるであらうか、地獄にあるとも有情は法によりて護られる、法なくしては、ここで、神すらも天よりまた落ちる。何をなさんか、いづこに行かんか、こゝでは方法が考へられない。如何にしても、われは、こゝより離れて、實に惡趣に行くであらう。こゝから離れたるわが生は何れの所に得らるべきか、と勇を集めて、意にてかく觀じた。こゝを離れて第七日に猪の生が得らるべきであると、かく自分に得られた生趣を見て自失して倒れた。この時、大因陀羅は、かの地に倒れて自失せるを見て、直ちに近づきて、甘露液もて注いだ。それより彼は正氣を得て徐かに起ちて彼の主を見て、兩足を抱いて、禮して、泣きながら、かく請ふた。「あゝ、あゝ、主よ、御身は大因陀羅である、一切世界の君であり、主である。下に倒れたるわれを見て、忽諸に付すべきではない。御身は實に世界の王であり、主であり、支持者である。御身は保護者である、法の教示者である。さればわれを護るべきである。御身を除いて、他の何れの保護者もこゝに實に存しない。されば同情の眼により、支持して、われを救へ。主よ、若し御身すら、われを救ふ能はざれば、主よ、

他の何人がわれを救ふであらう、あゝ、われは壞れて地獄に行くであらう、漫流にて御身と共に沐浴して、われ、身なほ清らかである。われ如何にして地獄に行きて不淨を行じつゝ住するであらうか。天女衆と共に常に喜林苑にさまよひ、天の合唱音楽等によりいたく喜ばされわれは樂しむ。今や、こゝより地上に落ちて、王舎城に近き磽确の地にて、第七日に、猪の生を得るであらう。そこに糞尿等の諸の汚物をも辛うじて得て食ひて、獵夫の群に襲はれつゝさまよふであらう。幾千の多年の間、かく猪の子となりて、糞便の汚物の中に轉動し、さまよひて住するであらう。かく、御身と共に、天の甘露を享受し、樂しみて、如何にして地獄に行きて、さまよひて諸の汚物を食ふか。この、望みのまゝの果實を興へる如意樹を捨て、磽确の地の樹木に依住して、その時、何を食ふであらうか。いかにしても、われは、こゝより離れて、實に己が業により動かされ、種々の苦を受くべく地獄に行くであらう、われに、慈悲ある御身によりて、速やかに惡趣より放たれ、天趣に赴くべき其方法が興へらるべきである、何れにしても、主よ、御身に、われに對し悲愍あらば、われを護れ。御身、落ちたるわれを見て忽諸に附するはふさはしからず。御身は實に世間の師である、一切世界の君である。主である、されば、速やかに、われを努力して救ふべきである。これが實に御身へのわが最後の對面なるべし。百千の生によるも、實に對面は得難かるべし、と。かの天子はかの神々の主にかく語りながら、兩足に禮して、面に涙を流して諦視して、立つた。

この時かの帝釋天はかく語れるを見て、慈悲のこもりたる心もて彼を慰めて云ふた。「涕泣する勿れ、賢者よ。勇を鼓せよ、泰然たれ。いかに諸の努力がなざるゝも、いかにしても死は必定である。死は最大の力あるもので實に一切有情の終りをなすものである。一切は死によりて奪はれる、死は何によりて亡ぼされるか。一切處に於て、一切の三界に於てさへも防がるべきではない、一切の生類には全く死が必定である。それ故に死を恐れる勿れ。何

が失望に依りて成就するか、されば平靜を持して三寶に歸依せよ。彼等に歸依して常に、専ら、念ぜよ。それより汝は惡趣を免れて、善趣を得べし。これこそ實に輪廻に於て祥運を得る爲めの大方便である。死が必然に凡てに共通であるときに實に他に何（の方便）も存在しない。されば他の心を捨て、三寶を念じ、南無佛陀、南無達磨、南無僧伽と云ふて敬事せよ。三寶の憶念を持して死せる人々は、功德分を享けて次第に菩提行を得て、終に極樂に行くべし。汝も亦、三寶を念じて、死して、よく功德を持ち、次第に菩提行を得て、極樂に行くと、かく因陀羅に依りて教へられたるを聞いて、この時、かの天子はしかすべしと隨喜して、また禮してかく云ふた。「今より後、大因陀羅よ、われは三寶を常に憶念し、彼等に歸依して實に信奉者となるであらう、」といひて彼は、大因陀羅の前に立ちて、合掌し、隨念して三寶に歸依して宣言した、「覺者なる吉祥者に歸命す、法なる救度者に歸命す、僧伽なる保護者に歸命す、一切時にわれは歸命し敬禮する、今より以後、われは常に三寶に歸依する、信奉者となりて、常に歸命し、憶念するであらう、」といふて、かの天子は死時至りて没した。いみじき功德より彼は兜率の天界に生れてあつた、常法として實に、諸天の神々が天より没すれば彼等は下界に行くべく、しかし、上部の住所には行かないであらう。この時、かの帝釋天は、天より没したる彼を見て、何處に彼れは生を得たるかと下界を觀察した、彼れは猪の胎内に生れたるかとする所の所を見たるも、いづこにも彼れを見なかつた。それより彼れは驚いて天眼にてまた、何處に彼れは生を得たるかと、かく觀察した。あゝ畜生中に生れたり、或は地獄中に生れたりとかく觀察した。これらの三界にも、遍ねき所に彼れを見なかつた。それより或は人界中に生れたりを見た。かの神々の主はそこにも一切の處に彼れを見なかつた。それより、四大王天の住處に生れたのであるとその中に於て一切處に於て觀察したるが見なかつた。それより帝釋天は驚いて忉利天（三十三天）に於て觀察したるが、

そこにも彼れを、あまねく、いづこにも見なかつた。かく一切の世界に於て、彼れの出生を觀察しながら、見ずして、驚いて帝釋天はまた、かく考へた。あゝ自分によりても見られないとは大希有のことである。何處に、彼れが確かに生れたるか。われ、その流轉の状態を解せない。誰れが實にその状態を知るであらうか、佛陀より他の何人もなし。佛陀こそ世界の觀察者であり、大神通の所有者であり、三時の知者である。それ故にわれこゝより行きて正覺者に近づき、かく、申し上げて、今、その状態を伺ふべきであると。かく意にて考へて、かの天の主は驚きを以て、速やかに祇園に於ける勝者の住所に降つた。そこでかれは善逝を見て、喜びと驚きとに満ちて、禮して前に立ちて合掌して云ふた。世尊よ、こゝに自分が來りしを知らるべし、されど、わが問はんと欲することを説明したまへと。因陀羅の言葉聞いて、かれ、正覺者なる牟尼の主は、かの功德あるものゝ住處を因陀羅に説明せられた。「橋戸迦よ、兜率と名ける世界は顯榮著し、かの天は三賓に歸依して（こゝに）没し、そこに樂しむ」と牟尼の主に依りて説示されたるを聞いて、かの三十天の主は驚き、いたく、悦喜して、禮して、かように讚歎の語を發した。

あゝ佛陀よ、あゝ達磨よ、あゝ僧伽よ、祥運をなすものよ、

歸依のみにてすら諸の有情は祥運の住所に至る。

佛陀に歸依するところの彼等は惡趣に行かず。

一切の罪を捨て、天界を得る、

法に歸依するところの彼等は惡趣に行かず、

人身を捨て、天身を得る、

僧伽に歸依するところの彼等は惡趣に行かず、

一切の苦を捨て、天の諸樂を得る、

三寶を念じて必然の死に赴くところの

かの人々は幸にして妙徳あり、正覺の位に到る」と。

この時、かの世尊は帝釋天によりかく善說せられたるを聞いて、隨讚してかの諸天の主なる橋戸迦にかく云はれた、

諸天の主よ、汝がかように説くやうに實にその通りである、

三寶を敬ふかの人々は幸いであり、妙徳がある、

佛陀に歸依するところの人々は惡趣に行かない。

煩惱の敵にうち克ちて正覺を得るであらう。

法に歸依するところの人々は惡趣に行かない、

魔の法を離れ菩提の法を得るであらう、

僧伽に歸依するところの人々は惡趣に行かない。

諸の罪惡より離れて極樂に行くであらう、

牟尼の主を敬はないところの人々は有の海にさまよひ

正覺の道より離れ、死して惡趣に行く。

正法を聞かないところの人々は煩惱に燒盡され、

魔の法を喜び、汚悪となり死して惡趣に行く、

僧伽を尊敬しないところの人々は善趣を知らず、

常に苦に惱まされ、墮落して惡趣に行く。

三寶を誹謗するところの人々は汚悪となり、魔に與し、

實に正道に於て行動せず死して惡趣に行く。

それ故に、善き人々にして常に善趣を欲すれば、

三寶を憶念して喜んで歸依がなさるべきである。

三寶を念ずるところの人々は惡趣に行かず、

一切の罪を捨て、速やかに極樂に行く、

極樂に於て勝者の主の法を聞いて隨喜し、

菩提心を得て菩提行を行ふ。

それより菩提行を次第に満たして俗諦の岸に達し、

第一義行を得て滅を得るであらう。

實にこの菩提道の種子を知りて、橋戸迦よ、

菩提を欲求する人々は、常に三寶の憶念をなすべく、

如何なる時にも常に三寶の憶念は棄てらるべきでない。

これらの三寶に歸依して行作すべきである。

かく、かの牟尼の主によりて説せられたのを憍尸迦は聞いて、かくの如くであると同意して、心悅ばしめられ、歡喜した、それより彼はかの世尊を禮して合掌して三たび右繞して、また、禮して天に行つた。それより天の都城に至り、善法殿に立つた。天界の神々を招いてその事柄を述べた。おー、一切の諸天の群よ。未曾有で、大功徳あり、正覺の原因といはれるその事を、心を集めて聞けよ。常法として實に諸天の中にて天より没せる諸天達は下方に行きて何れも決して上方に行かない。しかし、今、天から没した諸天は、三寶歸依をなして、上方の趣に行き、下方の生趣に行かないであらう、見らるべし、とある天子は三寶歸依をなし、天より没して兜率、天に生れて、彼は樂しむ、御身達もまた、それを見て、心を集めて三寶に歸依し、常に憶念して尊重より敬事すべし。それにより御身達は、決して惡趣に行かざるべく、常に天樂を享けて極樂に行くであらう。佛陀に歸依するところのものだちは、惡趣に行かず、煩惱の敵に打ち克ちて、正覺の地位を得るであらう。法に歸依するところのものだちは、惡趣に行かず、魔の法を離れ佛陀の法を得るであらう。僧伽に歸依したるところの彼等は惡趣に行かず、一切の罪を離れて極樂に行くであらう。三寶を敬はないところの彼等は有の海にさまよふて正法誹謗者として墮落し、死して惡趣に行く。諸の惡趣にてさまよひながら、彼等は種々の苦を受け、具惡分者として行動し、善趣に行かず、されば苦を捨て、樂を得るべく常に望むところの彼等は常に三寶を憶念し、歸依して敬事すべきである。それより常に御身に吉祥があり、惡趣に行かないであらう。善趣にこそ行くべく、正覺をも得るであらう」と。かの利益を望む神々の主によりて教示せられたるを彼等一切諸天は聞いて「仰せのまゝになすべし」といふて喜んだ、その時、一切の諸天は三寶に歸依し、常に憶念して恭敬し奉事した。かくてその時、三寶に歸依したる諸天は天より没して下方の趣に行かず、それより上方に登りて兜率、住所に往いて、三寶に歸依して彌勒に親近した。かくて帝釋天は

彼等の彌勒に親近せるを見て、隨喜をなして諸天と共に歡んだ。

と師によりわれに語られたる如く、われにより御身に語られた、大王よ、かく思ふて三寶に歸依せよ。それより、御身に常に、いづれの處にも、必ず、吉祥があるであらう。次第に菩提行を得て正覺の地位を得るであらう、而して大王よ法の増長の爲めに御身によりて臣民達を努めて覺せしめて三寶に歸依せしめよ、と。かく優波羅多に依りて説示せられ、善く説かれたるを聞いて王はかくなすであらうといひて、かやうに會衆と共に隨喜した。

功德を得ようと欲する人々にして間斷なく、實にこの猪因緣談を歡喜の心を以て、聞き、又は聞かしめるところの人々は惡趣に行かず、煩惱の群にうち克ちて、三徳に利益をなすものとなり、菩提行を楽しみ、兜率世界に至り、彌勒菩薩に意の如く近事する。

と寶喩臺に於ける猪因緣談畢る。

以上、猪因緣談の梵文の拙い二譯であるが、この兩者を比較して、後者が三寶歸依の功德を力説し、前者を義解し、大乘的思想を以て敷衍増廣した傳道文書なることを知るのである。寶喩因緣談は三寶歸依を高調するためにかかる因緣談であるが、大乘の菩提行の如きも、こゝでは説明されて居ないけれども、他の因緣談に於て之を委しく説明して居る。自分はこの因緣談の和譯を、逐次試みたいと思ふて居るのであるが、今はその一端を紹介したるに過ぎないのである。

參照本文

Cowell and Neil, *Diyāvadāna*.

拙著 *Ratnamālvadāna*.